

「画竜点睛」

—初稿—

2026/3/24

〈人物表〉

原田 圭子 (49)

原田美容外科クリニックの院長

原田 芳樹 (27)

圭子の息子

小園 幸乃 (29)

芳樹の婚約者

原田 竜司 (49)

圭子の夫

荻田 春子 (30)

圭子のクリニックの患者

1. 原田美容外科クリニック・外観（昼）

見上げるほどのオフィスタワー。

そのてっぺん、「原田美容外科クリニック」の文字。

圭子の声「ダウンタイム後の経過も良好ですね」

2. クリニック・診察室（昼）

診察室の窓からは都心の街並みが一望。

白衣姿の原田圭子（49）、患者・荻田春子（30）

の顔を品定めをするかのような目つきで確認。

顎のライン、目元、鼻筋を順に見ては、右の人差し指で太ももをトンっと静かに叩く。

最後、口元をチェック。

人差し指の代わりに小指で太ももを叩く。

圭子、表情を和らげて、

圭子 「綺麗になったね」

モニターには春子の術前、術後の顔の比較写真。

春子、思いの外、あまり晴れない表情。

春子 「あのさ先生、やっぱり唇もやった方がいいよね？」

春子の口元。少し、たらこ唇。

春子 「顎周りがスッキリしたから、余計目立っちゃってるよね」

圭子 「とつてもチャージングな唇だと思うけど——」

春子 「ねえ先生、正直に言って。お金なら大丈夫だから」

圭子、食い下がる春子をいなすように、

圭子 「いつも言ってるけど、春子さんはもうすでに美しいんだ

よ。本当は美容整形なんてしなくてもいいの。私じゃなくて、春子さんが気になるならやればいいと思う」

春子、納得いかない様子。

春子 「先生は、美人だからそんなこと言えるんだよ」

圭子、観念したテイで、

圭子 「……例えばね。例えばの話だけどね？」

3. クリニック・エレベーター（昼）

受付スタッフ、エレベーターに向かって深々と礼。

春子、打って変わって曇り無い笑顔。

エレベーター内にはクリニックのポスター。圭子の写真と「もうすでに美しいあなたのために」の文字。

4. 診察室（昼）

モニターには春子の新しい術後イメージ画像。唇の厚みが無くなっている。それを見て圭子、人差し指で太ももをトンッと叩く。

5. 原田邸・外観（昼）

絵に描いたような豪邸。

6. 原田邸・パウダールーム（昼）

圭子、鏡に向かい丹念にメイク。
仕上げ終わると自分の顎のライン、目元、鼻筋、口元を見ては、右の人差し指で太ももをトンッと叩く。
夫・原田竜司（49）、電話しながらやってきて、
竜司 「芳樹、もう来るってさ。駅まで車で迎えに行ってくるわ」

7. 原田邸・玄関（昼）

竜司 「ただいまー」
圭子 「おかえりなさい」
圭子の息子・原田芳樹（27）、入ってきて、
芳樹 「ただいま。母さん、久しぶり」
続いて、婚約者・小園幸乃（29）、やって来る。
芳樹 「（圭子に紹介して）あー、幸乃ちゃん」
幸乃 「はじめまして。小園幸乃です」
幸乃、緊張した面持ち。
圭子 「はじめて、芳樹の母です」
圭子、さりげなく幸乃の顎のライン、目元、鼻筋、口元を見て、振り上げた右人差し指が止まったまま。
ややあって、砕けた雰囲気で、
圭子 「……もう、そんな緊張しなくていいんだからね。取って食おうってんじゃないんだし、ゆっくりしてって」
竜司 「まあ、お菓子でも食べようか？ 甘いもの好き？」

8.

原田邸・リビング（昼）

幸乃、ぎこちない表情のまま、
幸乃 「好きです。ありがとうございます」
圭子、ハツとして右手を太ももから離す。

四人、紅茶を飲んでいる。すっかり打ち解けた様子。

竜司 「主席で卒業？」

と、驚く。

幸乃、恐縮して、

幸乃 「はい、一応」

芳樹 「一応、じゃねえよ。学部五百人の主席だからね」

と、得意げ。

竜司 「すごいな。芳樹から優秀な人とは聞いてたけどさ」

芳樹 「会社だって、最初は俺の直属の上司だったんだから」

竜司 「今は？」

芳樹 「今じゃもつと上。平社員と部長みたいなもん。出世する前に付き合っというて良かったわ」

竜司 「部長なの？？」

幸乃 「シニアマネージャー、なので一般的には課長と部長の間くらいですかね」

芳樹 「おじさん達に紛れて一人だけね」

竜司 「……なんかもう、逆に芳樹がすごいのかもな」

芳樹 「……だろ？」

圭子 「いや、あんたはあんたで頑張んなさいよ」

三人、どっと笑う。

幸乃だけ、ぎこちなく。

圭子、そのことに目を止める。

と、オーブンのアラームが鳴る。

竜司 「（幸乃に）昨日からバーベキュー仕込んでてさ」

幸乃 「いい匂いすると思ってました」

圭子 「（幸乃に）こういう時だけ気合い入んのよ」

竜司 「カッコつけさせろよ。ちょっとオーブン見てくる」

と、立ち上がる。

竜司 「芳樹、手伝え」

芳樹 「へいへい」

竜司と芳樹、キッチンへ。

9. 原田邸・キッチン（昼）

竜司、オーブンからスペアリブの丸焼きを取り出す。

芳樹 「うわ、うまそー」

10. 原田邸・リビング（昼）

圭子と幸乃、その様子を遠目に見ている、

圭子 「あの子のこと、よろしくね」

幸乃、不意を突かれ、狼狽える。

幸乃 「えっと、あの。私なんかで、大丈夫でしょうか」

圭子 「どういうこと？」

幸乃 「ご家族に受け入れてもらえるか、正直不安だったので」

圭子 「当たり前でしょ。芳樹が選んだ人なんだから」

圭子、幸乃の手を取る。

圭子 「主人も私も開業医だから、他の仕事のこと分からないんだけど、芳樹には勿体無い人ってことはよく分かったよ」

幸乃 「とんでもないです。私の話ばかりしてくれましたけど、

私にとっては芳樹くんだって——」

圭子 「もちろん。あの子も良いところ、沢山あるでしょ」

と、得意げな顔。

幸乃 「……はい」

二人、笑う。

圭子 「やっと笑った」

幸乃 「え？」

圭子 「可愛いじゃない。笑った顔」

11. 原田邸・リビング（昼）

テーブルには切り分けられたスペアリブやワイン。

竜司、酔っ払っていて、

竜司 「中三でサッカーで怪我した時、俺が手術したんだよ」

芳樹 「中二の時だし」

竜司 「開放骨折って言って、折れた骨が肉突き破って、血もド

バドバ出ちゃってさ。すぐグラウンドで応急処置したのと、スペアリブを使って説明。

竜司

「コイツ、それで血が無理になって医者諦めたんだよ。普通お父さんカッコいい、自分もなりたいたいってなるだろ」

芳樹

「(幸乃に)ごめん、これあと百回は聴くと思う」

幸乃

「芳樹くんも十回は話してるよ」

芳樹

「え、そうだったけ」

圭子

「(幸乃に)まだ序の口。プロポーズのくだり聞いた？」

幸乃

「いえ？」

芳樹、トレンディドラマの俳優かのような感じで、

芳樹

「圭子さん、僕は整形外科医であなたは美容外科医です。

出会って三日ですが、結婚するしかありません」

圭子

「(圭子もそのテイで)どういうことでしょうか？」

芳樹

「二人いれば首から下の事故は僕が、首から上の事故は圭子さんが治せるってことです。(素に戻って)はあ？」

竜司

「おい」

圭子

「ねえ幸乃ちゃん困ってんじゃん」

芳樹

「そうだそうだ」

竜司

「お前らのせいだろ」

幸乃、吹き出す。

芳樹

「いいんだよ。気使って笑わなくて」

幸乃

「いや、面白くて」

圭子

「よかったね、優しい子で」

竜司

「まあウチに嫁いでくれたら、どっちもタダで使い放題だからさ、そこは安心してよ」

圭子、思わず竜司をハッと見る。

一瞬の沈黙。

竜司

「あれ、僕らの名刺って渡したっけ？」

幸乃

「いえ」

竜司

「何かあったらさ、いつでも連絡してくれていいから」

と、幸乃に名刺を渡す。

竜司

「(圭子に)ほら？」

圭子、取り繕って、

圭子

「あとで、あげるね」

幸乃 「はい。ありがとうございます」

と、素直に笑う。

対する圭子、ぎこちない笑顔。

ふと、太もみに置いた人差し指を振り上げる。

12.

原田美容外科クリニック・診察室（昼）

圭子、右の人差し指で四回、太ももをトンッと叩く。

向かいには春子。じっと圭子を見る。

モニターには春子の術前、術後の顔の比較写真。

圭子 「うん。綺麗だよ。これ以上ないくらい」

春子 「そう？ ボトックスとか、まだ打たなくて平気？」

圭子 「十分。早くとも三ヶ月後で大丈夫」

春子 「……ふーん」

と、圭子の顔をまじまじ見て、得意げに笑う。

春子 「先生、今日は本当にそう思ってるんだ」

圭子 「え？」

春子 「いつもさ、他にやったほうが良いところあってもすぐ言わ

ないじゃん。あれは気遣ってたの？ 営業トーク？」

圭子 「え、なに？」

春子 「これくらい分かんないとセールスで飯食ってけないよ」

圭子 「……一枚上手だったってことね」

圭子、明け透けになって、

圭子 「うん、もう全部やったよ。やれるとこ全部。すごく綺麗」

春子 「そっか。じゃあ一旦は終わりか。いや長かったー」

と、背伸び。

圭子 「……春子さんはさ、何のためにそこまでやるの？」

春子 「え？」

圭子 「やっぱり、仕事のため？」

春子 「違うよ。私ブスの頃から営業成績トップ」

圭子 「そうなの？」

春子、頷いて、

春子 「むしろさ、結果出してからの方が気になっちゃって」

と、診察室の鏡を覗き込む。

圭子 「え？」

春子 「女はどんだけ成功しても結局のところ美醜でしか見られない。最後、そこを埋めようと思ったってだけかな」

圭子 「……そっか。春子さんもシニアマネージャー、とかなの」

春子 「は？」

圭子 「え、だって外資系だよね？」

春子 「私はマネージャー。この歳でなるの、超すごいからね」

圭子 「うん、だよね」

春子 「シニアに上がるなら、早くて十年後とかかな。日系企業よりは女でも昇進しやすいけど、それでも男ばっかだよ」

圭子 「そうなんだ」

春子、鏡に映る自分の顔を見て、口角を上げる。

春子 「なんかでも、この顔なら、そこまで行けそうな気がする」

圭子 「うん、行けるよ。春子さんなら」

13. 原田美容外科クリニック・廊下（昼）

圭子、すれ違うスタッフに挨拶をしながら、歩く。

クリニックのポスターに目が止まる。圭子の写真と

「もうすでに美しいあなたのために」の文字。

ふと、名刺ケースを開き、一枚取り出す。「シニアマネージャー 小園幸乃」の文字と顔写真。

じっと見て、右の小指で四回太ももをトンッと叩く。

（おわり）